山上に復た山有り

経営学部
矢田　博士

一、はじめに

タイトルに掲げたのは、「古絶句」という題で今に伝わる五言四句からなる詩の一節です。六朝梁の簡文帝蕭綱の命により徐陵が編纂した『玉台新詠』という、漢代から六朝梁にかけての主として男女の情愛を詠った詩を集めた詞華集の巻十に収められておりますが、いつ頃の作なのか、また誰の作なのか、よく分かりません。このように素性の明らかでない詩なのですが、一風変わったおもしろい詩ですので紹介してみたいと思います。

二、脈絡のない不可解な詩

まずは詩の全文を挙げてみましょう。

藁砧今何在　藁砧　今　何くにか在る
山上復有山　山上に復た山有り
何當大刀頭　何か当に大刀の頭なるべき
破鏡飛上天　破鏡　飛んで天に上る

「藁砧」は、わらを切る時に用いる石の敷き板。「何當～」は、いつになれば～になるのか、の意。「破鏡」は、真っ二つに割れた鏡。以上の語釈を踏まえて、この詩を訳してみますと、以下のようになります。

《わらを切るための石の敷き板は今どこにあるのでしょうか。山の上にまた山があります。いつになったら大きな刀の頭部になるのでしょうか。二つに割れた鏡が飛んで天にのぼっていきます。》

うーむ。何が言いたいのだか、よく分かりませんね。一つ一つの句の意味は明確なのですが、句と句とのつながり、脈絡という点では、まったく体をなしておらず、はたしてこれで一篇の完結した作品なのかと、頭を傾げざるをえませんね。

三、謎掛けと謎解き

実はこの詩、一種の謎掛けの詩なのです。では、どのような謎が隠されているのでしょうか。唐の呉兢の『楽府古題要解』の説をもとに謎解きをしてみましょう。

まず一句目について、呉兢は以下のように言っています。

藁砧、鈇也。問夫何處也。
[藁砧は、鈇なり。夫　何れの処なるかを問うなり。]

「鈇」は、藁を切るための刃物。藁を切るための石の敷き板である「藁砧」を、呉兢はまず、同じく藁を切るための道具である「鈇」を暗示するものとして捉えます。そしてさらに、「鈇（fū）」が同音の「夫（fū）」を暗示するものと捉え、この句を「夫はどこにいるのかと妻が問うたもの」と解釈しています。

「藁砧」と「鈇」は、藁を切るための道具という点では一対のものと言えます。夫婦もまた一対の関係にあります。あるいは、明示されているのは「藁砧」だけで、「鈇」が明示されていないことから、「藁砧」の二字で「鈇がない＝夫がいない」ことを暗示していると捉え、「夫がいない、今どこにいるのか」と解釈することもできるかもしれません。

次に、二句目については、以下のように謎解きをしています。

重山爲出字。言夫不在也。
[山を重ぬれば出の字と為る。夫の在らざるを言うなり。]

一句目に比べれば、分かりやすいですね。確かに「山」という字の上に「山」という字を重ねて

書けば、「出」という字になりますね。つまり二句目は、「夫が出かけてしまって不在であること」を意味していたのです。

三句目については、「大刀頭」という言葉に謎が隠されているとして、以下のように言います。

刀頭有環。問夫何時當還也。
[刀の頭に環有り。夫　何れの時にか当に還るべきと問うなり。]

刀の頭部、すなわち刀の柄の先端部分は丸い環のような形をしています。そして、その「環 (huán)」の字から同音の「還 (huán)」の字へと連想を働かせると、三句目は実は、「夫はいつになれば還ってくるのでしょうか。」との妻の問いかけであったことが明らかになるわけです。

最後に四句目については、「破鏡」という言葉に着目して、謎解きをしています。

言月半當還也。
[月半ばにして当に還るべきを言うなり。]

中国の古典詩歌では、「鏡」はその丸い形により、しばしば「満月」を比喩するものとして用いられます。例えば、南朝梁の王僧孺の詩に、美人を迎え入れたばかりの南康太守の陳氏のことを詠った「月夜詠陳南康新有所納 [月夜に陳南康の新たに納るる所有るを詠ず]」という詩があります。そして、その冒頭の二句に以下のような対句があります。

二八人如花　　二八　人は花の如く
三五月如鏡　　三五　月は鏡の如し
《年は十六、人は花のように美しい。十五夜の月は鏡のように丸く美しい。》

ちなみに、王僧孺のこの詩も、『玉台新詠』の巻六に収められております。それはともかくとして、「破鏡 (二つに割れた鏡)」とは、「二つに割れた月＝半分の月」を暗示していたわけで、四句目は実は、「夫はいつになれば還ってくるのでしょうか。」という三句目の妻の問いかけに対する返答になっており、「月の半ばになれば、きっと還ってくるでしょう。」という意味を隠していたのです。

あるいは、丸い満月は団欒や円満の象徴でもあることから、「破鏡＝半分の月」という言葉は、さらに「夫が不在で欠けている夫婦の現状」をも暗示する表現と捉えることができるかもしれません。

以上の謎解きを踏まえて、四句全体を解釈すれば、以下のようになるでしょう。

《夫は今どこにいるのでしょうか。出かけてしまいました。いつになったら帰ってくるのでしょうか。月の半ばになれば帰るでしょう。》

これで句と句とのつながりがすっきりとしましたね。つまり、この詩は、外出した夫の帰りを待つ妻の思いを詠った一篇の完結した作品であったのです。

四、おわりに

『日本語の歴史』(山口仲美著、岩波新書) という本を読んでいたところ、『万葉集』から以下の歌の一節が引用されていました。著者の訳とともに挙げてみます。

見るごとに　恋はまされど　色に山上復有山　人知りぬべみ　……
《(旅先で、よれよれになった自分の衣を) 見るたびに、手入れをしてくれる妻がますます恋しくなるけれど、その気持ちを素振りに出すと、周りのうるさい連中が感づいてしまうので、(長くて寒い冬の夜を一睡もしないで、私は妻を恋い慕っている。)》

これは「戯書の万葉仮名」の例として挙げられたものです。「戯書」とは、著者の説明によれば「漢字の背後に、文字遊びの要素を取り込んだウィットに富む表記」のことで、上記の例でいえば、傍線部がそれにあたります。なお、『万葉集』は「ひらがな」「カタカナ」が生まれる前に編纂されたものですから、本来ならばすべての作品が「万葉仮名」と呼ばれる漢字で表記されていますが、ここでは意味をとりやすくするために、問題の

「戯書の万葉仮名」以外の部分は、漢字かな交じり文で示してあるとのことです。(1)

では、ここで問題です。「色に山上復有山(いで)ば」の句は、どのように読むのでしょうか。「古絶句」における謎解きをすでにご存知の皆さんであれば、もうお分かりですね。そうです、「色に出ば」と読むのです。

それにしても、ここで注目すべきは、万葉人(まんようびと)の歌に「古絶句」における「山上復有山」の句が万葉仮名としてそのままの形で用いられていることです。このような形で文学作品に用いられていることから、この句がすでに、万葉人たちの間での共通の知識になっていたことを窺わせます。では万葉人は、この句の存在をどのような経緯で知り得たのでしょうか。男女の情愛を好んで和歌に詠った彼らのことですから、おそらくは『玉台新詠』を通してではなかったか、と思われます。

『玉台新詠』については、すでに幾つかの全訳本があります。(2) 皆さんも、おそらくは万葉人も読んだであろうこの本を読んでみられたらいかがでしょう。

【注】

(1) 作品番号一七八七「天平元年己巳冬十二月歌一首」。引用部分を全て万葉仮名で示すと以下のようになります。

毎見(みるごとに) 恋者雖益(こひはまされど) 色二山上復有山者(いろにいでばいで)
一可知美(ひとしりぬべみ) ……

(2)『玉台新詠　上・中・下』(鈴木虎雄、岩波書店、岩波文庫)
『玉台新詠　上・下』(内田泉之助、明治書院、新釈漢文大系)
『玉台新詠』(石川忠久、学習研究社、中国の古典25)

辞書の星に宇宙を見る?!

法学部
中尾　浩

＊をつける規準

フランス語に限らないが、辞書にはたいてい＊がついている。平均して３千から４千語程度の語彙に＊がつけられている。そのほか、色刷りになっていたり、文字の大きさで表したり、それらを組み合わせている場合もある。これらの単語は「重要語」や「基本語」と辞書に書かれている。辞書によって呼び方はいろいろで、辞書を仔細に眺めていると、実はこの呼び名の違いの段階で、根本的な考え方の違いがあることがわかる。以下の４つのパターンが考えられる。

１：(誰かにとって) 重要であり、なおかつ基本的な語
２：(誰かにとって) 重要ではあるが、基本的ではない語 (つまり、難度が高い語)
３：(誰かにとって) 基本的ではあるが、重要ではない語
４：(誰かにとって) 基本的でもなく、重要でもない語

このうち、１が学習用辞書においてはもっとも理想的な語であり、４は本来＊がついてはならない語である (実は、４に該当するような語に＊がついていることがある)。最も多いのが、２と３である。これらは１のグレーゾーンに該当する語なので、どの程度１に近いか (遠いか) が辞書の善し悪しを分けることになるだろう。

＊のついた語を見ていると「誰にとって」基本なのか、「誰にとって」重要なのかが明確ではない事がよくある。日本語で考えてみよう。「かたつむり」はおそらくかなり基本的な語と言える。